

林間学校と林間学荘について〔報告〕

林間学校委員会

要旨、本校における林間学校が発展し、林間学荘を建設、新しい形の林間学校を作り出そうとする意図及び、試みについて述べてみたい。

I 学荘建設以前の林間学校

年年高まる一般の登山熱に対し、学校として積極的に生徒に基本的な登山の正しいあり方、また学校を離れた大自然の中における集団生活の正しいあり方等を生徒に学ばせるため、昭和33年から高校一年生の全員に対して木曽駒ヶ岳登山を中心として夏休みに林間学校を実施した。最初の2年間は木曽福島駒の湯旅館をベースとして木曽駒ヶ岳の日帰り登山、35年九合目玉ノ窪小屋での一泊登山、36年からはベースを木曽福島から伊那谷の駒ヶ根市に移し、菅ノ台高原荘を利用して、千丈敷山荘での一泊登山を42年まで続けた。

II 学荘建設の動機

このように木曽福島駒ノ湯にはじまった本校の高一に対する必修林間学校は、登山訓練のみならず、大自然の中でなければできない貴重な体験学習の効果をあげたものと信じている。ところがこの間学級増による生徒数の増加、大企業の観光資本によるロープウェイの架設等、内外の条件や環境の変化は、そうした心配をしなくてすむような自然環境の中に、学校独自の恒久的な校外学習施設をもつことができれば一層望ましいのではないかということになった。

このことは従来の林間学校の発展的な変化であり、ただ単に自分の学校の林間学校施設をもちたいという単純な動機でなく、もっとも質的に変化したものといえよう。

III 学荘建設の目的

学校教育本来の立場から考えてみると、私達の住んでいるような大都会の中ではやりにくい教育面も決して少なくない。都会を遠く離れた大自然の中で生徒達の心の中にひそんでいる生活の原動力としての野性的な人間性や、人間が本来もっている自然に対応する力を引き出して、発展させ、更にそれを内面化させることによって都会にもどってからの日常生活に、そういう根源的なものをうまく転移させ、適応させるようにしてやることは生徒の生活を深化するという点から考えて大変必要なことであるといえよう。またそうした大

自然の中での学習は、校内では得られないものが得られると同時に学校内で行った教育をそういう環境の中でどう表現し、展開させてゆくかを学ぶ機会でもあり、ただ頭の中で考えるだけでなく、からだで学び、からだで表現することに比重がおかれ、考えるにしても一人で考えるだけでなく、仲間を考え、更に大きな集団の中で考え、同時にいくつかの集団をあわせて組織化してゆく過程を学び、自分達の行事計画を自主的に行なうことのできるような能力を発展させる機会ともなると考える。

IV 学荘建設の意義

こうした林間学荘を学校自体が独自にもつことができたならば、根本的に新しい教育方針をたてなおし、それに基づいて独自の教育環境を作りあげることができよう。また、そうした教育環境の積みあげ、つくりかえもまた思うようになるであろう。即ち従来の林間学校という固定概念から脱却し、もっと大きな時点から学校教育の中における、学荘利用の教育カリキュラムが、時期や期間に制約されることなく、考え得るということが今後考えられてよいであろう。

V 学荘の利用計画

以上述べたような目的、意義実現のため具体的な利用計画として以下のようなものが考えられるであろう。

1. 学校生活への適応や、生活指導を中心とする学習と訓練。
2. 自然に親しみ、健康なからだと美しい情操を育てるための登山や芸術活動。
3. 理科、社会科などを中心とした実験、観察、見学、調査などに重点をおいた集中学習。
4. 創造的思考を育て、応用的な技術を身につけるための労作、読書、討論などを中心とした新しい形態の学習。
5. 修学旅行にかえることのできるような新しい形式の合宿の実験。
6. 運動クラブ、文化クラブ、サークルなどの合宿や生徒個人、或いは小集団の学習合宿や、登山、ワンダーフォーゲルの基地としての利用。

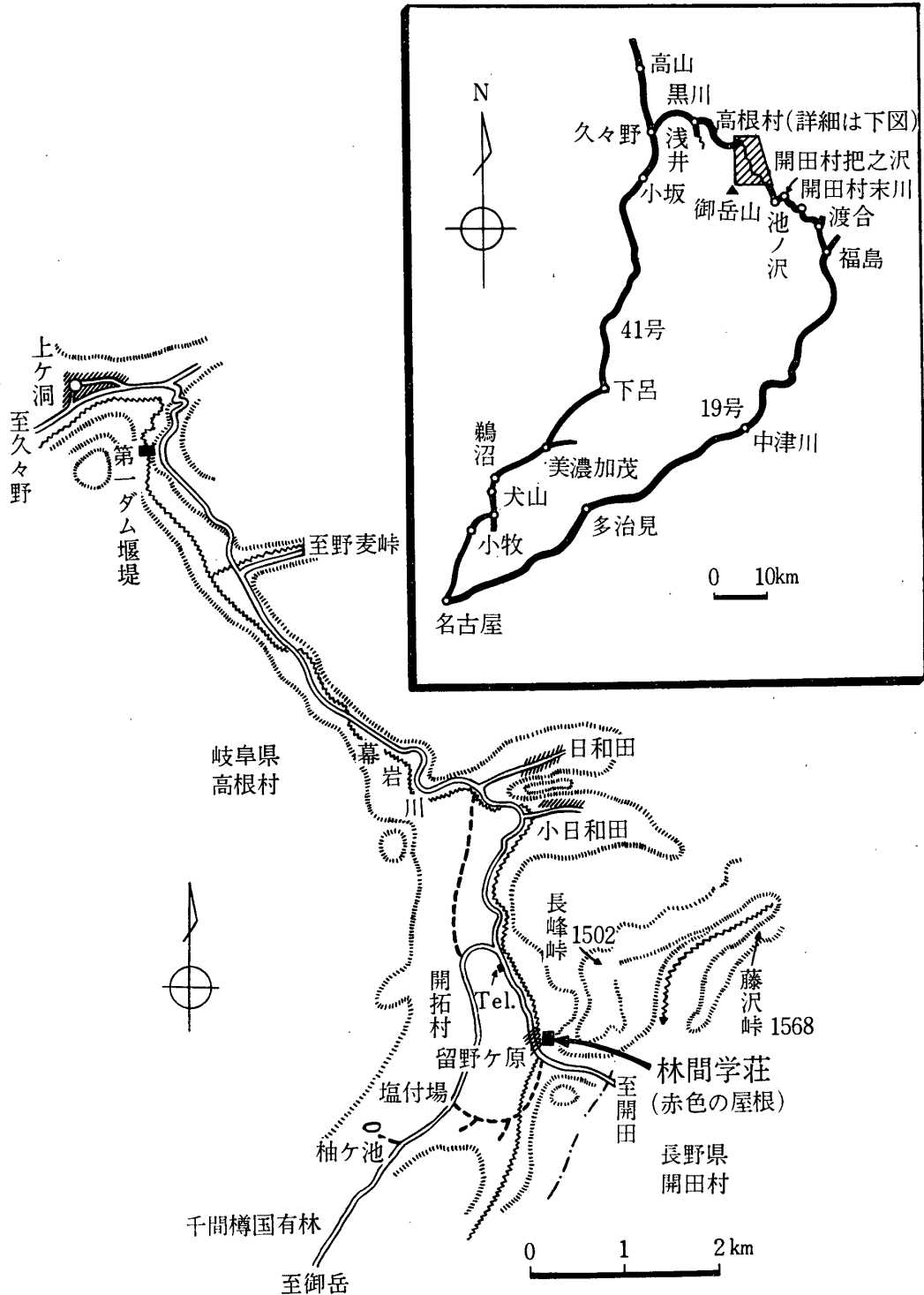
Ⅵ 学荘の建設

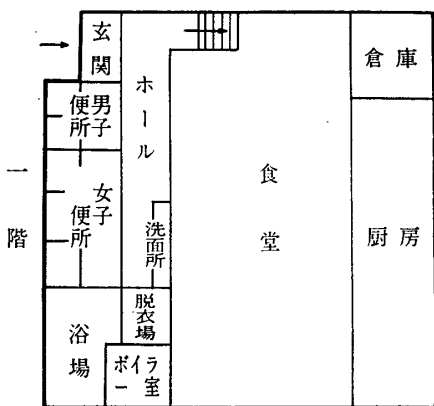
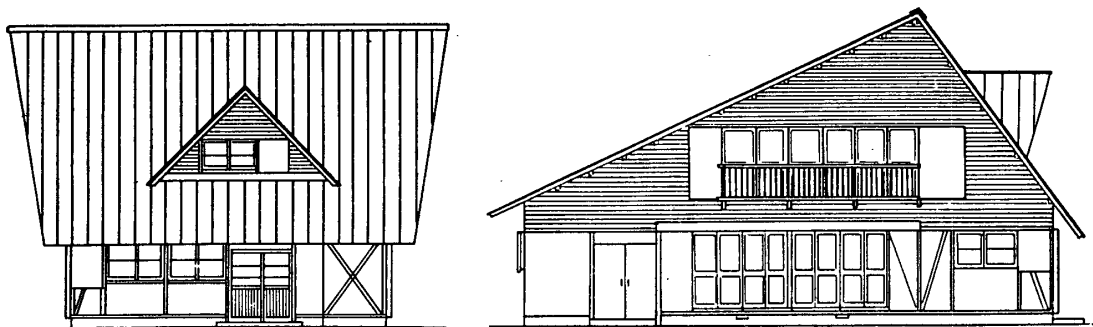
42年度からはじまった学荘の建設に対する希望は、土地の選定、資金計画としたいに具体化した。

所在地 岐阜県大野郡高根村大字小日和田字桶シ
ッタ2番

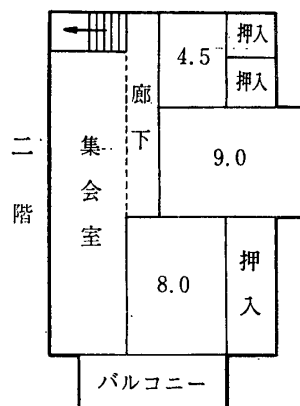
敷地面積 9,720㎡ (3000坪)

建物延面積 201㎡ (62坪)





風呂……石油ボイラー給湯
水道……自家給水ポンプ設置
厨房……プロパンガス使用



便所……水洗式
食堂……40畳の畳敷き、間仕切り可能、食堂のほか集会室、寝室としても利用

Ⅶ 今年度の林間学校

以上のように今年7月なかば、本校の林間学荘は竣工した。ここで次に起った問題は夏休みに予定した林間学校を開くための設備や備品の整備と林間学校の準備であった。とにかく学荘の整備については今まで全然経験のないことで、予想されていたこととはいえ、担当教官の苦労は並々ならぬものであったと推察される。またどのような形の林間学校をもつかについては、現地調査をもとにして従来の形式にとらわれず初年度としてどのようにやり得るかについていろいろの角度から検討、立案した。その結果まず今年度は、高1の必修林間学校を3泊4日でHR別に3期、中学校2年生の希望者による林間学校を2泊3日で1期、8月初旬から中旬にかけて実施することとした。

高1 林間学校日程

- 第1日 学校出発、学荘着
- 第2日 環境整備、グループ活動
登山、地理、地学、生物、社会調査等
- 第3日 グループ活動の報告会
奉仕活動
キャンプファイヤー

- 第4日 反省会、
環境整備、学荘出発、帰名

中学校林間学校日程

- 第1日 学校出発、学荘着
環境整備
- 第2日 ハイキング、レクリエーション
- 第3日 反省会
環境整備、学荘出発、帰名

今年度実施した林間学校が従来の林間学校とその内容において変わったのは次のような点である。

1. HR別の実施

学荘の収容力の点から大体60名前後が一時に宿泊し得る限界と考えられ、高1の150名を3期に分けて実施することとした。そこで男女別(男子2期、女子1期)、無作意グループ別、学習グループ別等、いくつかの分け方についていろいろな角度から検討した結果、HR別実施とした。そしてHR担任を中心として前記日程の枠にしたがって、できるだけそれぞれのHRの特長を生かして、自主的に具体的な計画をたてさせることにした。

2. 全員登山の廃止

従来駒ヶ根市菅の台をベースとして木曽駒ヶ岳の

一泊登山が林間学校の目的の一つの中心をなしていた。それについては最初の林間学校のはじまりのところで述べた。今年度の林間学校の登山については現地の人話しでは日帰り登山として御岳山、一泊登山として乗鞍岳が考えられた。そこで御岳山に目標をしばり、全員登山の可否について考えてみた。ここで起った問題は、日帰り登山にするか、山頂で一泊登山にするか、また落伍者を全然出さないような登山が考えられるかということであった。その点木曾駒ヶ岳の場合は最初日帰り登山で落伍者が相当数あったため、教育的な考慮から山頂で一泊登山、更に体力に応じ二つのコースを利用した。ところで現状での御岳登山についてはコースが一本であり、現地の村人は4時間で登頂できると言っていたが、実際に現地調査の時、途中まで登った結果(残雪のため登頂できなかった)都会生活の本校生徒の全員を登頂させるためには村の人のというような時間では相当無理のあることがわかった。また一方では3泊4日の日程の中で日帰り登山が無理な場合1泊登山をすることは登山にウェイトがかかりすぎるのではないかという考えもあった。そのため、全員登山については今後の問題として残し、今年度は後で述べるグループ活動の一環として登山グループを作ることとした。

3. グループ活動

今年度は従来試みなかった生徒のグループ活動を考え、実施してみた。グループは大きく登山、地理・社会、地学・生物の三グループに予じめ生徒の希望によってわけた。

まず登山グループは学荘を中心とした、ハイキングコースの開発、御岳山に限らず日帰りで登山できる登山コースの発見等について考え、現地を歩く。

地理社会グループは、現地における村の生活調査に重点をおき、村の旧家や農家を訪づれ、それぞれあらかじめ設定したテーマにしたがってインタビューや調査研究を行なう。

地学・生物グループは岩石採集、植物採集、地質調査、牧場における牛の観察等村の自然環境についてテーマをもって活動する。

このグループ活動については一応の成果を得たも

のと考えられる。今後こうした資料の集積が学荘をわれわれにより近づけてくれるものと思う。

4. 奉仕作業

勤労の尊さを体験させると同時に、学荘を自分達の手で整備し、学荘を愛する気持をもたせるために設定されたもので、散歩道作り、門や門標の作成、ケルンを作ったり、敷地内の植物に名札をつけたり、方位板を作ったり、岩石標本置場を作ったり、その他環境整備を行なった。

この点については従来の林間学校とちがって自分達の家という愛着感が生徒の計画や活動にみられた。都会生活が次第に利己的になり連帯意識や他人のために奉仕するという気持の薄れているといわれる現在の生徒達にこうした活動は非常に効果的であったと考える。

5. 中学校2年生の林間学校

従来中学校2年生全員に対して必修林間学校を実施してきたのであるが、学校行事全体から考えて、行事縮少の立場から、中2の必修林間学校と中3の修学旅行に対して検討を加え、この行事が一つにできないかということになった。そして漸定的に今年度の中2について希望者のみについて前記のような日程の林間学校を実施した。今後この問題をどのようにまとめあげるかについては相当の困難を予想される。

VIII 今後の方向

以上のようにして今年度からはじまった本校の学荘建設に伴った林間学校について簡単に述べたのであるが、今年度は何分にも初年度であり、準備不足や環境不馴れの感をまぬがれない。しかしわれわれが意図した、新しい林間学校はその第1歩をふみ出したものとして貴重な成果を得たと思う。今年度の林間学校から今後に残された問題も少くないが生徒同志、教師と生徒間の人間的な交流の不足、対話の不足が問題となっている現在、こうした林間学校の新しい試みが、そうした面にも大いに効果があるとわれわれは信じている。そして今後この学荘の利用の仕方とも関連して、こうした面で教育の新しい分野を開拓してゆきたいと考える。

(原田)